

『資本論』 カール・マルクス



岡崎次郎訳
(全9巻)
文庫判
1972~75年・大月書店
(国民文庫)
(ほか翻訳あり)

小幡道昭

東京大学大学院経済学研究科教授／理論経済学

『資本論』第一巻の刊行は大政奉還の年、舞台はマルクスが二〇年近く亡命生活を過ごしてきた大英帝国、だから日本の資本主義化もロシア革命も想定外、眼前の発達した資本主義の全体像が主題だ。ただ全体を丸ごと捉えろというのは厄介で、外から眺められるものは部分、宇宙を外から眺められる人はいない。この宇宙全体を捉えようとすると「時間と空間の関係は？」なんていう抽象論から片づけねばならない。資本主義も実は同じ。人間の社会なら外から眺められそうだが、それはその時代が終わった後の話。『資本論』も「商品とは？」という抽象的な問いで始まる。私たちがそのなかで暮らしている社会の全体像は、見知っていないながら説明できな

い「謎」を解き、内側から構成原理を探りだすほかない、と言いたいのだろう。でも、これは高校の物理をいきなり相対性理論から始めるようなもの、難しいにきまつている。だから巷の解説本はこの辺をサッと飛ばして先を急ぐ。すると意外や意外、ワーキングプア、金融恐慌、グローバルイズム、なんだか眼前の現象があちこちで説明されている……ような気がする。幕末の本が現代に当てはまるなんてスゴイ、さすがマルクス、本質を見抜いていたんだ、と本の帯は謳う。

とはいえ、よく見ると現実はずっと違う。「似てる」と「同じ」は違うんだ。それで「ホントはこうじゃない？」と一手打ち返してみたくなる。私が『資本論』を読み始めた四〇年前には社会主義国が健在で、こういう批判的な読み方を許さぬ雰囲気はまだあった。今はかえってよい時代かも、批判するほど味がでる本なのだ。そこで、今の資本主義を基盤に見立てマルクスに対局願うと、これが滅法強い。部分で勝ったと思ったときはど大局で惨敗、全体の本質を洞察する力が違う。こうして三〇年余り、大学院のゼミで毎年のように『資本論』を読み、マルクスの指南で指してくる院生諸君に惜敗し密かに涙してきた研究室もいつしか追われる歳となつた。何もこんなに長く付き合うことはないが、一度対戦してみると全体をつかむセンスがグンとアップすること必定だ。